

## ケンタッキー州ドーヴァー — ラフカディオ・ハーン最初の妻マティの故郷 —

里見 繁美



ウィリー・アンダースン



マティ・フォーリー



ラフカディオ・ハーン

米国オハイオ州シンシナティからおよそ1時間くらい車で南下したところに、ハーンの最初の結婚相手であったマティ・フォーリーの故郷ケンタッキー州ドーヴァーがある。小さな村で、今日でも何軒かの家が点在している。ここはオハイオ川北側のシンシナティとは違って、南北戦争以前は奴隷州であった。従って、マティを含めた多くの奴隷がこの州ではかつて過酷な労働を強いられていたのである。この村まで来る時はオハイオ川を挟んで、オハイオ州側を通ってきたので、南北戦争時の北軍の総司令官であったグラント將軍の生家を途中ポイント・プレゼントという所で見ることができた。

ケンタッキー州と言えば、ケンタッキー・バーボンやルイヴィルという町で開催されるケンタッキー・ダービー、はたまた南北戦争時の英雄エイブラハム・リンカーンの生地、そしてダニエル・ブーンの伝説の地などで知られている。更に、文学作品に言及すれば、1920年代ジャズ・エイジの旗手F. S. フィッツジェラルドの作品『華麗なるギャッツビー』に登場する主要人物デイジー・ビュキャナンがルイヴィルの出身という設定になっている。そうしたケンタッキー

州の北東部にあって、まさにオハイオ川にへばり付くように位置するのが小さな村ドーヴァーである。ここは、その地名からしてイギリス系の移住者が多かったのであろう。オハイオ川の川幅はまさかドーヴァー海峡ほどには見えなかったであろうが、しかしそれを何らか連想させるものがあつたのだらうと想像される。

さて、その小さな村ドーヴァーであるが、代々ここに土地を所有するスコットランド出身のアンダースン家の元でマティは育てられる。ムラート（白人と黒人の間に生まれた子）とはいえ、勿論奴隷の身分である。奴隷の身分としてアンダースン家に仕えていくことになる。そして1868年に所有者アンダースン氏との間に息子ウィリアム（通称ウィリー）が生まれる。ウィリーは従って黒人の血を四分の一受け継いだ、当時の言葉でいわゆるクワドルーンということになる。マティは1854年生まれであるから、ウィリーは彼女がおよそ14才の時の子供であった。一般的に、奴隷所有者は当時このように奴隷の身分の女性との間に少なからぬ子供をもうけていったと言われている。

マティは、ウィリーがほぼ1才になる頃の

1869年に、シンシナティに移っていく。推測するに、アンダースン氏はマティに子ができたので、やっかい払いするかのように旅立たせたと考えられる。この時は、奴隷制が廃止されてから既に数年が経っていたのである。

シンシナティに移ってきたマティは生計を立てていかなければならないので、とりあえずハズレム夫人が経営する下宿屋で料理人として働くことになる。そして数年が経った後の1872年頃にハーンと出会うということになるのである。このあとの経緯はよく知られているように、1874年6月14日に二人は黒人牧師の仲介で結婚する。子連れ結婚であった。息子のウイリーは小学校に通う年齢になると、「ウイリー・ハーン」という名前のもとに学校に通学することになる。しかしながら、やがてマティとの間に破局が訪れ、ハーンがニューオーリンズへ去ると、ウイリーの名前は「ウイリー・アンダースン」に変えられていくのである。ウイリーは元々アンダースン氏との間に生まれたとはいえ、私生児であったわけだから、相手の名字を一方的に名のるのはやや奇妙だが、そこには息子を思うマティの配慮があったのであろう。

ウイリーはやがて成長し、コロンビア大学を卒業してシンシナティに戻り、黒人たちのリーダーとなって活躍し、シンシナティでは一躍名士となっていくことはよく知られている。彼は生前、一時期であったにしても、ハーンが自分の父親となったことを実に誇りにしていたという。

さて、そのウイリーが生まれ、マティーが暮らした地であるケンタッキー州ドーヴァーには、今日も依然としてアンダースン家の子孫たちが暮らしている。その子孫たちは「ウイリアム・アンダースン」の名前は知っていた。自分たちの祖先と考えてのことであろう。しかし、彼が黒人であったということを知らせると、やや怪訝な顔をしたのは、やはりここは今でも南部なのか、という思いにさせられた。更に、ウイリーの実の父親は彼らの祖先であるという事実を果たしてどの程度まで認識しているのであろうか、とも考えた。いかんせんそれは130年も前の出来事なのだから。いずれにしても、ドーヴァーあるいは隣のメイズヴィルという場所は、ハーンのかつての伴侶マティにしる、あるいはウイリーにしても切っても切れないゆかりの地であり、そこはまた、アンダースン家という、これまた2人にとって切り離すことのできない人たちが依然として住み続けている地なのでもあった。ドーヴァーの一つの通りに「アンダースン・アヴェニュー」という名前が付けられているのを見たとき、「何とも象徴的だ」と思う次第であった。

最後に、このドーヴァーからの帰路、オハイオ川対岸の小高い丘の上に、いわゆる「アンクル・トム小屋」の一つを、偶然にも見ることができたのは幸いであった。

(さとみ しげみ 文学部助教授)